

萬古焼の あゆみ

萬古焼は、江戸時代中期に桑名で陶器専属の間屋を営んでいた豪商・沼波家の弄山（1718〜77）が、茶趣味が高じて朝日町小向に窯を開いたのが始まり。萬古焼という名は、沼波家の屋号の萬古屋から命名され、作品に「萬古」「萬古不易」の印を押したところから、そう呼ばれるようになった。

「萬古」「萬古不易」とは、いつの世までも栄える優れたやきものという意味である。



古萬古赤絵四方蓋物（江戸） W125 × D125 × H98mm

蓋が古萬古の作で、本体の器が有節萬古の作となっている大変珍しい貴重な合作。



古萬古の陶片。窯跡より発掘された素焼きの器の高台脇に「萬古」印が押されている。